元スポーツ記者による野球考

硬式野球部　大西禧充（昭和 39 年卒・故人）

1．私の人生訓

「試練を耐え忍ぶものは幸いである。それを忍び通したならば神に約束された命の冠を得るであろう」　　―ヤコブによる手紙第 1 章 12 節―

2．関学野球 100 年

古い資料によれば 1894 年（明治 27 年）関学普通部でベースボールが始まるとある。

1899 年に同好会グループから「部」の形態になる。これを「野球部発足の記念日」とし 1999 年（平成 11 年）高校、大学が協力し「関学野球 100 年祭」の祝典を開く。

3．関学高等部栄光の歴史

1920 年（大正 9 年）第 6 回夏の甲子園大会で慶応普通部を 17-0 で破り優勝。

1928 年（昭和 3 年）第 5 回センバツ大会で優勝。

センバツは 1998 年（平成 10 年）に 59 年ぶりに出場。

夏は 2009 年（平成 21 年）70 年ぶりに出場する。

4．関西学院大学硬式野球部

1913 年（大正 2 年）高等（商）部野球部として誕生。

1931 年（昭和 6 年）関西六校リーグが発足。初年度は 5 位。昭和 22 年初優勝。

昭和 34 年には春秋連覇の偉業を成し遂げる。

昭和 38 年から入れ替え戦が導入され長期に渡る二部を体験し、昭和 57 年、新リーグ関西学生野球連盟（関学、関大、同大、立命、近大、京大）が発足、27 年間の“暗黒時代”の末、平成 5 年春優勝、さらに平成 24 年、19 年ぶりの 13 回目の優勝を勝ち取った。

5．野球界の目を覚まさせた二度の“黒船”の来航

戦前の野球界は大学野球、中学野球が圧倒的に人気でプロ野球の入る余地は無かった。それが 1934 年（昭和 9 年）ベーブ・ルース、ルー・ゲーリッグを中心にした米大リーグのオールスターチームが来日、全国 12 都市（東京、函館、仙台、富山、横浜、静岡、名古屋、大阪、小倉、京都、大宮、宇都宮）で 16 試合をした。全国どこでも大人気で特に静岡では、まだ京都二中の学生だった沢村栄治がゲーリッグの本塁打 1 本に抑える「伝説の力投」を演じ日本中を興奮させた。

対戦成績は 0 勝 16 敗だったが、この熱気に読売新聞社社主の正力松太郎氏が「野球は商売になる」とプロ野球設立を決意。12 月に日本職業野球チーム「大日本東京野球倶楽部」（読売ジャイアンツ）を作った。同時に大阪の阪神電鉄、阪急電鉄、名

古屋金鯱軍、セネタースと球団設立をよびかけた。

日本に初めて“黒船”が来航したのは、寛永6年（1853年）この衝撃的な出来事は鎖国で長い眠りに入っていた日本人を叩き起こしたといわれている。

「太平の眠りを覚ます正喜煎（蒸気船）たった4杯で夜も眠れず」

二度目の“黒船”はそれから15年後、戦後の1949年（昭和24年）に来日したオドール監督が率いるサンフランシスコ・シールズだった。完全な3Aのチームだったが7戦全勝でまたも日本中に衝撃を与え、プロ野球を2リーグ制に導いた。

6．スポーツ新聞の誕生

2リーグ制が誕生するとともにスポーツ紙も誕生、競争に火がついた。スポーツ紙の全盛は1998年（平成10年）各社の50周年前後、コンビニが力添えをしてくれる。しかし、アイホーン、スマートホンに取って代わられる。

7．タイガースに教えられる

第三次吉田監督時代（1985年から87年）の三年間は勉強になる。一年目74勝49敗7分で21年ぶりのセ・リーグ優勝、初の日本一、二年目は60勝60敗10分、勝率5割で3位、三年目41勝83敗6分の球団最低勝率で最下位。まさに「天国から地獄へ」激動の三年間でいまも“天地会”を作り旧交を温めている。

8．天国と地獄の間で学んだこと

① 三年目の節目

日本の学校制度には三年ごとの節目がつけられているが、一年目は緊張し思わぬ力を発揮する（優勝）が、二年目には慣れが生まれ（3位）、三年目には甘えが出て（最下位）に沈む。

② いい準備をして始めていい結果を生む

プロ野球で名将といわれた西本、鶴岡、上田監督や多くの指導者から「監督の一番大切なのはいかにいい準備をするかだ」という話をきいた。シーズンが始まると選手任せ。それまでにいい補強、いい練習、いい指導をしておくことが勝利につながる。

③ 念力のあるチーム、選手が勝つ

昭和48年、広島商・畠山圭司監督が作新学院・江川投手と対戦する前日に語った言葉で「勝負事は力のあるものが必ず勝つものでない。いかに念力があるかで決まる」。念力とは同情でも激励でもなく全国の人に「広商を勝たせてやりたい」と念じてもらえるパワーで「私は広商をそういうチームに育ててきました」と豪語していた。その言葉通りセンバツ準決勝でファンの声援を受け、思わぬ敵失に恵まれ“打倒江川”をなしとげた。思い返せば、徳島池田高が11人野球で準優勝を飾り、後の「江川騒動」で阪神に移籍した元巨人の小林繁投手が20勝を挙げるなど、絶大な“念力”を受けて成功した例は筆舌に絶えない。

社会人でも「自分さえよければいい」と突き進み失敗した人の例は多く、皆に応援して貰える人生を送らないと大変だ。

タイガースもあの三年間に一年目に大フィーバーに支えられ、二年目はただのチームになり、三年目には内輪もめが発覚しファンのひんしゅくを買っては最下位もやむを得なかったというのが結論だろう。

著者略歴

ジャーナリスト、関西運動記者クラブ会友。現スポーツニッポン新聞社大阪本社、関西学院大学硬式野球部 OB 会会長。1941 年 4 月 27 日（昭和 16 年）兵庫県生まれ。72 歳。昭和 39 年関西学院大学社会学部卒。スポーツニッポン新聞大阪本社に入社。学生時代に硬式野球部に在籍し入社後すぐに編集局報道部でプロ野球担当記者となる。広島、近鉄、阪急などを担当し、「花のトラ番」と呼ばれる阪神担当を 12 年間経験する。報道部長、編集局長を経て取締役事業担当を歴任。役員兼任で系列のスポーツニッポン大阪サービス社の代表取締役社長を勤める。

プロ野球取材の他紙面で「世界のスポーツ」を連載、38 カ国のスポーツ情勢を紹介。また㈱ミズノスポーツとタイアップして「野球のやさしい科学」の冊子を作成し全国の高校関係者に配布。また平成元年から二年半毎週日曜日朝、毎日放送で 1 時間番組の「桂三枝（現 桂文枝）のスポーツマガジン」でコメンテーターを務める。

（写真提供『関学スポーツ』）

（写真提供『関学スポーツ』）